

踏切事故防止啓発

冬の交通安全運動（11月13～22日）に合わせ、白老町交通安全町民運動推進委員会は11月20日、ウポポイ前の小沼線通り踏切で事故防止啓発を行い、ドライバーに安全運転を呼び掛けました。

啓発には苫小牧警察署、町内会連合会、交通安全協会、交通安全指導員会などから20人が参加。「踏切でのトラブル対処法」等が書かれたチラシを配りました。

町内では平成21年以降、踏切内での死亡事故は発生していません。



ふるさと給食

ふるさと給食の日の12月3日、町内の6小中学校でホッキカレーが提供され、子どもたちがふるさとの味を楽しみました。

いぶり中央漁協（本間貞徳代表理事組合長）から約250kgのホッキの提供を受けて750食が振る舞われました。このうち、白老小学校では5年生も安藤尚志教育長らとともに郷土の味を堪能しました。



同漁協からは令和2年度から食材の提供を受けており、これまで「ほっきごはん」などがメニューになっています。

知っておこう アイヌ文化

アトウイ

アシリパ アウク ワ オンカミアン
ナ＝新年を迎えて拝礼しましょう（新年おめでとう）。地球上のあらゆる生命の源、海はアイヌ語でアトウイと呼び、知里真志保は『知里真志保著作集3 生活誌・民族学編』の中で、アイヌ民族は本来、漁撈が生活の中心であり、「アイヌ文化の基本的な性格の一つは、その『海洋性』にある」と述べています。その根拠として知里は例えば、魚のことをイペ、あるいは道南地方でチエプと呼ぶことに着目し、どちらも食べ物を意味していた言葉が、魚を意味する言葉になっていることから、食べ物と言えば魚、とりわけ川で比較的簡単に採れたサケだった時代があり、川での漁撈を中心とした生活はその後、沼や海へと拡大したというのです。さらに汁物を意味するルルという言葉も、本来は海水のことであり、海から汲み上げた水を汁物に生かしたことから、暮らしの拠点が海辺であったことを物語るものだと思います。他にもいくつかの根拠を知里は著書の中で挙げているわけですが、いずれにせよ北海道の内陸部に暮らすアイヌ民族であっても、その言語や信仰、習慣を細かく観察すると狩猟よりも漁撈を生業の中心としていた時代の面影があると言うのです。次号ではアイヌ文化にゆかりの深い海の生き物についてご紹介し、海とアイヌ文化の関わりについて引き続き考えていきたいと思います。



知里によれば、白老のある老人がチエプとは魚一般のことで、チエプというのはサケに限る名前だと話し、この使い分けの背景にアイヌ民族が漁獲対象とした魚種の増加があるという

問い合わせ先：イオル事務所 チキサニ ☎82-6301